

テストを活用した意欲的に学ぶ態度の育成

澤 田 満 星城中学・高等学校

1. 研究の目的

近年、本校に入学してくる生徒の英語力にかなりの差が出てくるようになった。すでに中学校卒業程度の英語力を有する生徒もいれば、英語に対して苦手意識を持って入学してくる生徒もいる。このように英語力に差がある生徒に対して、習熟度別授業を展開して対応してきたが、まだ生徒の学力を伸ばしきれてはいないという思いがあった。

本校では平成 25 年度より、生徒のさらなる英語力向上を目指し、英語教育に重点を置いた新教育プログラムに取り組んでいる。その後 2 年が経過し、一定の成果が出てきている。しかし、生徒の様子を見ていると意欲的に学習に取り組んでいるとはまだまだ言いがたい。生徒が英語学習に興味を持ち、意欲的に学ぼうとする環境を教員が作り出すことができたならば、成果はもっと出てくるものと考えられる。

本校では創立以来、生徒の基礎学力定着を目的として「五苦楽テスト」という名称で小テストを全校挙げて実施している。小テストを活用して生徒が意欲的に学ぶ態度をどのように育てることができるのかについて、この「五苦楽テスト」を通して研究を進めたい。

2. 研究について

(1) 五苦楽テストについて

本校では、①学習習慣の確立、②基礎学力の定着と学力の向上、③学習意欲の向上、の 3 つを目的として「五苦楽テスト」という小テストを全校挙げて実施している。そのユニークなネーミングには、五教科で実施するので五、その時は学習がちょっぴり面倒で苦しいので苦、しかし、間を置かずすぐに学習することで定期テストの勉強が楽になるので楽、という思いが込められている。

月曜日から金曜日までの 5 日間、毎日 1 教科ずつ授業時間内で実施している。前回の五苦楽テスト後に進んだ 1 週間分の授業内容をテスト範囲として、1 教科 20 点満点で出題している。8 割の 16 点を合格点としている。週末に学級担任が各教科の点数を集計し、順位を付けて成績一覧表を作成している。成績は全教員で共有して生徒の指導に役立てている。また、生徒が校内での相対的な位置を把握して、学習に対する意欲を持つために、成績一覧表を教室に貼り出し公表している。

(2) 課題

五苦楽テストを実施していることで一定の成果は上がっている。しかし、成績下位層の生徒においては、五苦楽テストの 3 つの目的が果たされずに、次第に学習意欲を失ってしまう生徒が多くいると感じている。創立当初は教員も 3 つの目的を十分に意識していて、その目的に即したテストを実施できていたはずだ。しかし、いつしか「あれもこれもテストに出して学習させたい」「難しい問題を出

してもっと勉強させたい」という教員側の思いが強くなりすぎて、当初の目的を見失ったテストが実施されてしまっているのだろう。

ここで、小テストについて改めて考えてみたい。学校教育における小テストの目的とは何であろうか。それは、①学習習慣の定着、②学習内容の定着、③学習方法の定着、であると考えられる。

生徒にとって「テストがあるから学習する」というのも事実である。この生徒心理をうまく活用しながら頻繁に小テストを実施することで、先送りをせずにその場で取り組む学習習慣を身に付けさせることができる（①学習習慣の定着）。

また、学期に1、2回の実施となり必然的に範囲が広がる定期テストよりも、小テストは頻繁な実施が可能でその分範囲が狭くなる。学習すべき項目の量が多かったりするとそれだけで生徒の学習意欲は低下しがちである。少ない出題量で取り組み易くすることが小テストは可能である（②学習内容の定着）。

さらに、小テストでは例えば英単語の小テストのように出題内容を絞り込み易い。定期テストのように多種多様な出題がされる場合、例えば、単語力、作文力、リスニング力といったような様々な学力を身につける必要がある。当然そのための学習方法もまた様々である。しかし、出題内容を絞り込んだ場合は、求められる学力やそれを身に付ける学習方法が明確になる。そのため、教員がテストの目的や学習方法を生徒に伝え易くなるし、生徒はその分取り組み易くなる（③学習方法の定着）。

つまり、小テストをうまく活用すると、学習に取り組む際に立ちはだかる心理的なハードルの高さを少しだけ下げてあげて、生徒が学習に対して意欲的に取り組む態度を育てることが可能である。

本校の五苦楽テストには、③学習方法の定着という視点が抜け落ちていると感じている。実際のところテストの範囲を伝えるだけでその効果的な学習方法まで具体的に伝えてはいない。そのため、特に成績下位層の生徒は得点を伸ばすことができずにいて、学習に対する意欲を失い、ますます得点できないという負のスパイラルにはまっているのであろう。このあたりに、成績下位層の生徒の意欲的に学ぶ態度を育成するカギが潜んでいるのではないだろうか。

（3）仮説

五苦楽テストを実施する際に従来は、テスト範囲のみを生徒に伝えているだけであった。そこで、出題形式や配点、効果的な学習方法などの情報まで生徒に伝えて、どのように学習すれば解答ができ得点上がるかを具体的に指導してみる。そうすることによって、生徒の学習に対する心理的なハードルが下がり学習に取り組む易く感じることで、学習時間が増加して、意欲的に学ぶ態度が育成されるのではないかと考えた。

（4）研究の方法

①研究の概要

表1 五苦楽テストの実施期間と出題方針

期間	日 程	出 題 方 針
I 期	4月13日～ 5月11日	特に意図せず、従来通りに出題する。
II 期	6月 1日～ 6月18日	慣れさせるため毎回の形式をそろえて出題する。
III 期	9月 2日～10月 7日	効果的な学習方法まで具体的に指導する。
IV 期	10月27日～11月19日	範囲内の文法を使用した実力問題を出題する。

五苦楽テストを、定期テストを区切りとする4つの期間に分けて実施する。それぞれの期間において出題方針を変え（表1参照）、それに応じて生徒の学習に対する学習意欲がどのように変化するかを調べる。成績上位層の生徒と下位層の生徒で変化に違いがあるかについても併せて調べる。

②質問紙調査

どのくらい五苦楽テストの学習をがんばって取り組んでいるかについて、生徒が10点満点で自己評価する。自己評価の点数を「五苦楽テストがんばり度自己評価点」と名付けて、質問紙を用いて調査する。がんばり度自己評価点が高ければ、その生徒は意欲的に学習に取り組んでいると考える。調査は、各期間における最後の五苦楽テストと同時に実施する。

③調査対象

星城中学校全校生徒77名（成績上位層生徒39名、下位層生徒38名）

3. 結果と考察

（1）自己評価点について

調査結果を図1にまとめた。生徒の「五苦楽テストがんばり度自己評価点」は順調に上がっていった。中でも、効果的な学習方法まで具体的に伝えたⅢ期において、自己評価点の上昇率が最も高かった。やはり、学習方法に迷っている生徒が多くいて、そこに教員が具体的に助言することで心理的ハードルが下がり、学習に対する意欲が上がったものと考えられる。

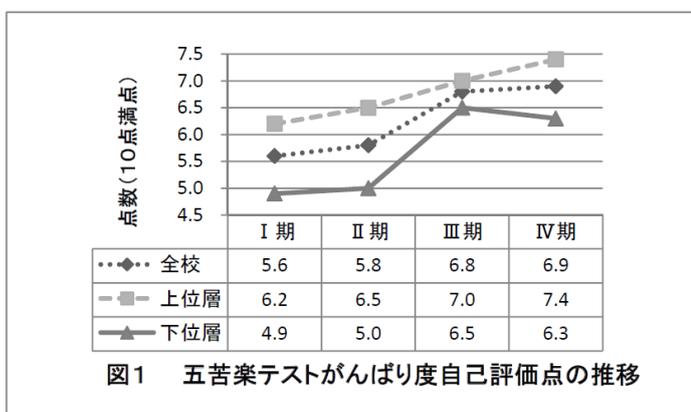


図1 五苦楽テストがんばり度自己評価点の推移

さらに、生徒を成績上位層と下位層に分けて分析してみると、上昇率は下位層生徒の自己評価点の方が高いことが分かった。学習方法に悩んでいる生徒は、成績下位層により多くいるためであろう。この手法は、成績下位層生徒の学習意欲を育てるのに効果的である。

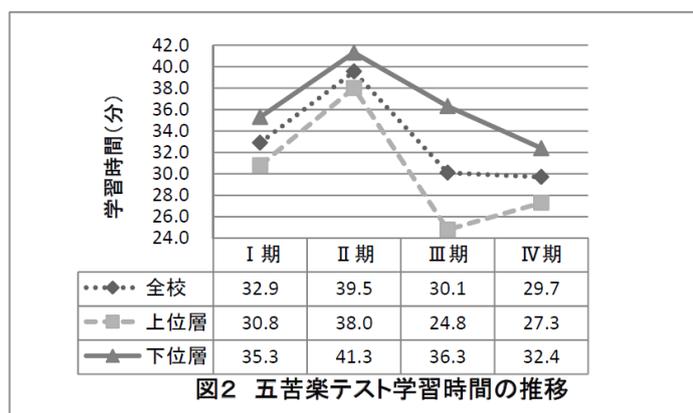
また、Ⅲ期の終わり頃に上位層の生徒から「五苦楽テストはそんなに学習しなくても満点が取れる」という内容の発言が聞かれた。丁寧に学習方法まで伝えていくと、やはり上位層生徒の中には20点満点をとる生徒が多くなった。このままでは彼らの学習意欲低下を招くと考えて、Ⅳ期の五苦楽テストではあえて英作文の実力問題を出題し難易度を上げてみた。その甲斐あって、Ⅳ期でも上位層生徒の自己評価点は上昇し続けた。上位層生徒の場合、チャレンジ精神をうまく刺激してあげることが生徒の意欲を育てることになるのだろう。

一方、下位層生徒の自己評価点は下降した。下位層生徒でもⅢ期になるとテストで今までにない高得点が取れるようになった。中には満点を取る生徒も出てきた。そのため高い学習意欲を維持することができていた。しかし、Ⅳ期の実力問題には対応できずに得点が減少した。そのことが自己評価点下降の原因になったと考えられる。

（2）学習時間について

図2に同時に調査した学習時間をまとめた。仮説では、学習に取り組みやすいと感じることで学習

時間が増加し、生徒の意欲的に学ぶ態度が育成されると考えた。しかし、実際には学習意欲が増加しても、学習時間がそれに併せて増加する現象は見られなかった。Ⅱ期以降のテストでは出題形式が固定された。そのために効率よく学習することができるようになり、時間をあまりかけなくても満足 of いく得点を挙げるができるようになったからだと考えられる。



Ⅳ期には上位層生徒のみ学習時間が増加した。これは、彼らが出題される実力問題にしっかり対応するべく学習時間を増やしたものと考えられる。下位層生徒の学習時間が増加しなかったのは、実力問題は最初からあきらめて対応せず、とれる問題をしっかりと学習しようと考えて学習したため、Ⅲ期からの傾向が続いたものと考えられる。

4. まとめ

本校生徒は入学試験で選抜されているものの、彼らの持っている学力はとても幅広い。習熟度別授業などで対応しているが、テストは同一のものを実施している。定期テストは評価を目的にしているのでそれでよいが、同一の問題で五苦楽テストを実施することに違和感を感じていた。小テストが持っている目的が果たされていないと感じていたからだ。この度、こうして研究の機会をいただいたので長年考えていたことを研究の目的とした。

結果として、やはり成績層の異なる生徒が抱えている課題は異なっていて、その対処法も成績層ごとに異なることが明らかになった。成績下位層の生徒には学習方法まで言及するなど心理的なハードルを下げるのが効果的である。また、成績上位層の生徒には実力問題を出題するなど逆にハードルを上げることが学習意欲を高めるということが分かった。

在籍生徒の学力が幅広い本校において、小テストを活用して意欲的に学ぶ態度を育成するためには、それぞれの成績層の生徒に対応する出題内容と形式そして事前の指導を1つの五苦楽テストにバランス良く入れ込むことが大切だということが分かった。

今後は、生徒の意欲をもっと上げるための効果的な出題形式や、難易度のバランスを探っていきたい。また、事前事後の指導方法や、定期テストとの関連、さらには五苦楽テスト運営全般の見直しにも研究を広げていきたい。

参考文献

- 1) 上山晋平、2014年、『英語テストづくり&指導完全ガイドブック』、明治図書出版
- 2) 静哲人、2002年、『英語テスト作成の達人マニュアル』、大修館
- 3) 根岸雅史、1993年、『英語教師の四十八手(第2巻) テストの作り方』、研究社
- 4) 若林俊輔・根岸雅史、1993年、『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』、大修館